

九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業

子ども育成 WG 共同研究

幼児教育・保育現場における外国にルーツを持つ

家庭に関する調査

調査報告書（第3報）

2025 年 3 月

長崎短期大学・九州龍谷短期大学・西九州大学短期大学部

九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携

プラットフォーム事業

子ども育成 WG 共同研究

幼児教育・保育現場における外国にルーツを

持つ家庭に関する調査

調査報告書（第 3 報）

2025 年 3 月

目次

九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業の概要	3
I.九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォームとは	3
II.九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業子ども育成 WG の事業概要について	3
1. 本事業のテーマ	
2. 本事業の目的	
3. 本事業の主な取り組み	
III.幼児教育・保育現場における家庭支援に関する共同研究について	5
1. 共同研究の目的	
IV.「外国にルーツを持つ子どもの集団適応上の課題と保育者の対応に関する質的調査」	6
1. 本研究の目的	
2. 調査方法	
3. 結果	
4. 今後の課題	
資料 インタビューガイド	30
執筆分担	32
QSP 子ども育成 WG 共同研究構成メンバー	32

九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業の概要

I.九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォームとは

本プラットフォーム事業は、長崎県と佐賀県という 2 つの県の産学官が連携・協働することによって、両県の共通する課題の解決に向けて知力と人的資源を投入し、活気と魅力ある九州西部地域の創出に資することを目的とするものである。

II.九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業

子ども育成 WG の事業概要について

1. 本事業のテーマ

九州西部地区の子どもの健全育成に向けた子ども育成支援の体制づくり

2. 本事業の目的

核家族や一人親家庭の増加等、子どもを取り巻く社会の変化により、保護者と子どもが抱える子育てに関するニーズが多様化している。養育環境の変化に伴い、子育てのしづらさや不安感を持つ保護者も少なくない。

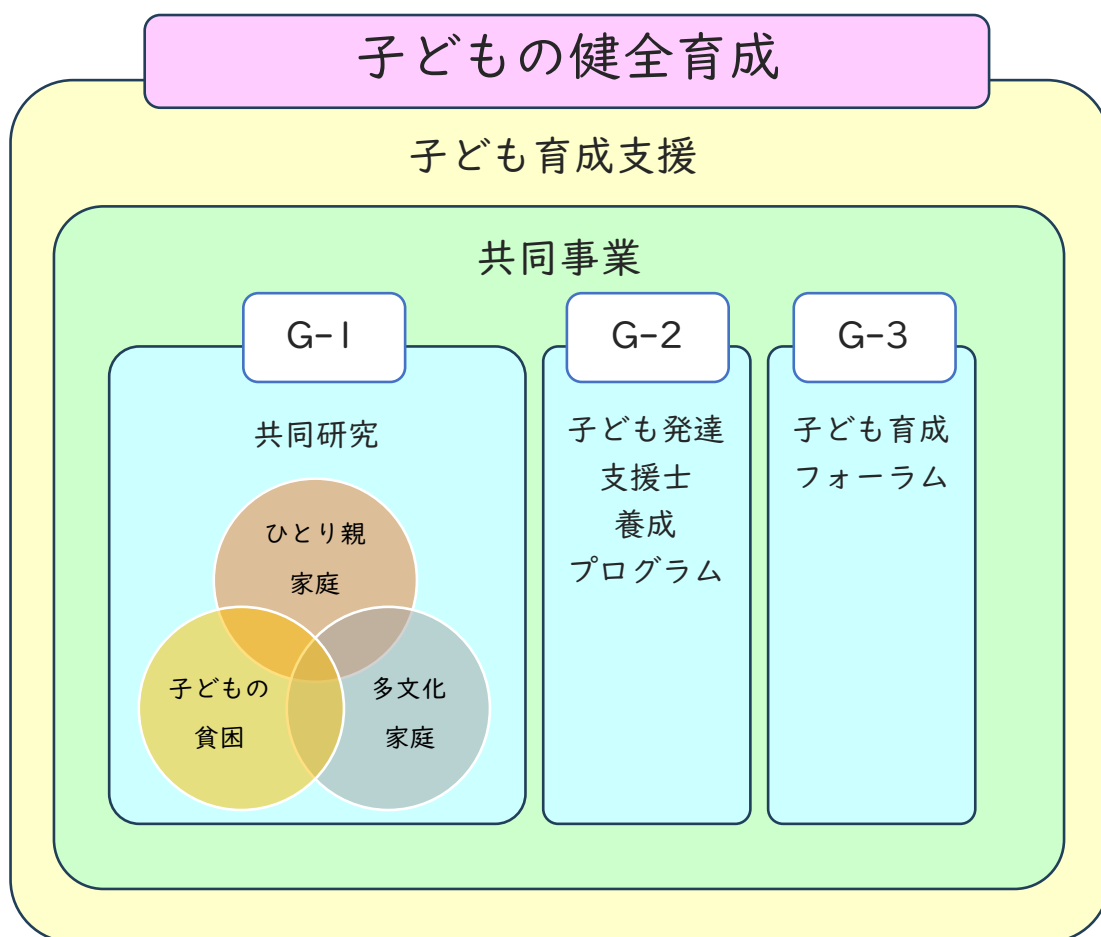
子どもやその保護者が地域の中で安心・安全な子育て・育ちをするために必要な支援とは何か、実態を把握し、九州西部地域で産官学が連携してできる「子ども育成」支援の体制づくりを目指す。

3. 本事業の主な取り組み

- ① 参画機関との連携及び課題の抽出
- ② 子育て・子育てに関わる共同事業の実施
- ③ 子どもの健康・養育環境などの実態調査に 基づく共同研究
- ④ 子ども育成フォーラムの開催

※図1 子ども育成支援事業イメージ図参照

図1 子ども育成支援事業イメージ図



子ども育成連携事業の構成（イメージ図）

※図1は2023年度の事業計画を基に作成

Ⅲ. 幼児教育・保育現場における家庭支援に関する共同研究について

Ⅰ. 共同研究の目的

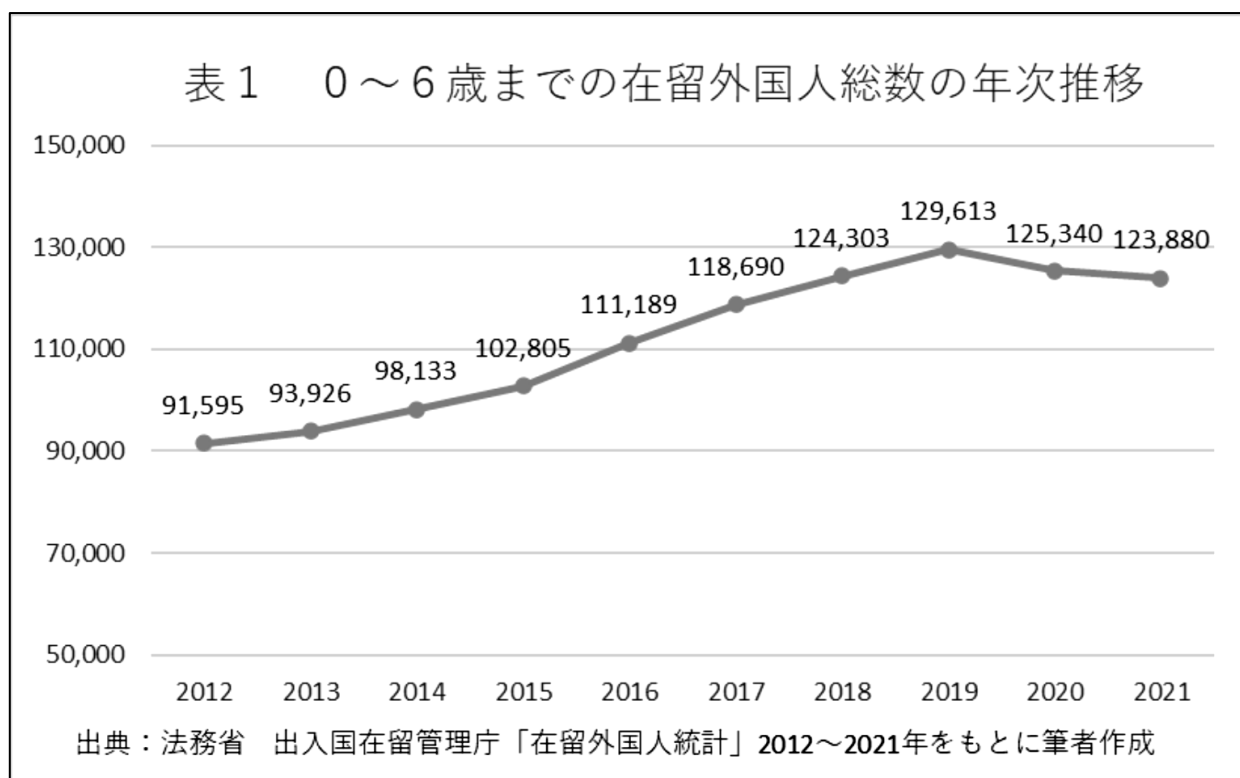
近年、近年、様々な社会的な情勢の変化によって、保育者視点における「特別な配慮を要する家庭」が増えている。それらの家庭は、何らかの原因があり、そうならざるを得ない理由がそこにはあり、保育者にとっての「特別な配慮を要する家庭」というのは、「さまざまな理由・背景で困難さを抱えている家庭」であると考えられる。

そこで、本研究では「特別な配慮を要する家庭」として、「発達的な課題を抱える子どもの家庭」、「保護者が障がいや心の病気を有する家庭」、「貧困家庭」、「外国にルーツをもつ家庭」などについて幼稚園、保育所・認定こども園を対象とした現場（保育者・園長・施設長）の実感・困り感を調査する。結果の分析にあたっては、多角的な視点（保育・教育・心理・文化・社会・経済など）からその要因について検討を行い、これらの地域における課題を抽出する。さらに、地域に根差した保育者養成校としてこれらの課題に対する対応についても検討する。

Ⅳ. 「外国にルーツを持つ子どもの集団適応上の課題と保育者の対応に関する質的調査」

1. 外国にルーツを持つ家庭の現状と課題

現在では、現在では、在留外国人の数は年々増加の一途をたどっており、法務省によると、2021年12月時点で約279万人が日本において外国人として登録されている。そのうち、保育の対象と考えられる0～6歳までの子どもの数は、全体として増加傾向にある。現在では、約12.3万人の在留外国人の乳幼児が日本で暮らしており、保育所・幼稚園等ではそれらの子どもたちへの対応が急務となっている。



2. 本研究の目的

そこで本研究では、「外国にルーツを持つ家庭」について幼稚園、保育所、認定こども園を対象とした現場の実感・困り感に関する検討を行うことを目的とする。昨年度は、佐賀及び長崎県の幼稚園・保育園・認定こども園を対象に実施したアンケート調査の結果を中心に分析を行った。本研究では、保育者へのインタビュー調査を通して、外国にルーツのある子どもの集団適応に関する困り感や保育、保護者対応に関する工夫の詳細を検討することを目的とする。

3. 調査方法

(1) 調査協力者

調査協力者は、長崎県内の某認定こども園に調査協力を依頼した。インタビュー調査は、過去に外国にルーツのある幼児の保育を経験したことがある保育士6名を対象とした。

(2)インタビューについて

過去に外国にルーツのある幼児の保育を経験したことがある保育士 6 名を対象とし、インタビューを実施した。これまでの保育経験の中で、初めは集団適応に時間を要したが、のちに良い集団適応を示した幼児 1 名を想起してもらい、保育中に見られた集団適応の難しさや、集団適応に変化が見られた時期とその時の行動について聞き取りを行った。想起した幼児の様子をインタビューする際に、入園してから卒園・退園するまでの経過を 3 つの時期（初期・中期・後期）に分け、各時期の適応の様子について質問をした。また、外国にルーツのある幼児の保育と保護者の対応をする上での困難感とその困難感に対する工夫・配慮についても聞き取りを行った。調査協力者の概要と、実際のインタビューで語られた幼児の概要について、Table 1 に示す。

Table 1: インタビュー協力者とインタビューで話された幼児の概要

調査協力者	保育者歴	対象児の概要
A	6 年	入園時 3 歳、退園時 4 歳。女兒。両親ともに外国籍であり、英語圏である。
B	4 年	入園時 2 歳。男児。両親ともに外国籍であり、英語圏である。
C	15 年	入園時 2 歳、退園時 3 歳。男児。両親ともに外国籍であり、英語圏である。
D	1 年	入園時 3 歳、退園時 4 歳。女兒。両親ともに外国籍であり、英語圏である。
E	1 年	入園時 3 歳。女兒。両親ともに外国籍であり、英語圏である。
F	5 年	入園時 2 歳、退園時 5 歳。男児。両親ともに外国籍であり、英語圏である。

(3) 分析方法

分析には、KH Coder Version 3 Alpha.17e を使用した。テキスト計量分析では、頻出語の抽出、階層的クラスタ分析、共起ネットワーク、抽出語と外部変数共起ネットワークの 4 つの分析を行った。各時期の外国にルーツのある幼児の様子の語りにおける頻出キーワードを把握することを目的に頻出語の抽出を行った。「入園当初（初期）の様子」「入園してしばらくたった時期（中期）の様子」「入園後しばらく経ってから卒園または今現在に至るまで（後期）の様子」「子どもの対応における困難感とその対応の工夫」「保護者対応における困難感とその工夫」のそれぞれの語りを構成するカテゴリーを整理することを目的として、階層的クラスタ分析を行った。抽出語の出現頻度と抽出語同士の関連性を要約することを目的として、共起ネットワーク図の描画を行った。

(4) 倫理的配慮

研究倫理に関しては、研究の趣旨および調査への参加について、またデータの管理等について紙面に説明を行い、調査の回答をもって承認されたと判断した。本調査は各参画校の倫理審査を受けて、承認されている。

4. 結果

(1) 外国にルーツのある幼児の入園した当初（初期）においてみられた集団適応の様子について

外国にルーツのある幼児の集団適応の様子で、初期においてみられた語りに対して、KH Coder を用いて分析を行った。以下にその分析結果を示す。

① 外国にルーツのある幼児の初期においてみられる集団適応の様子について抽出された頻出語リスト

入園した当初（初期）においてみられた集団適応の様子についての頻出語の Table 2 に示した。出現回数が高い語としては、「子ども」（38 回）、「食べる」（19 回）、「言う」（18 回）、「最初」（16 回）、「泣く」（15 回）であった。「食べる」の使われ方を見ると、「食が違うので、最初はもう本当に食べなかったの

で…」 「一口食べてもらっているのが難しく、見た目で判断して食べないことが多かった」などの表現が多くみられた。このことから、入園した当初に見られる困難感として、食事場面での困難さが推察される。「泣く」に関しては、「泣くことで、いやだったとかを知らせる様子が見られた」「保護者と離れることに抵抗があり、泣いていた」「暴れたりする子どもではなかったので、泣いて気づいてほしそうにしていた」という語りが多くみられ、日本語での表現の難しさがあり、その分、泣きなどの態度で自身の気持ちを表現するような様子が入園当初の様子として見られることが示された。「見る」に関しては、「涙を流して登園することもすごく多かったんですけど、できるだけ、私たちが知っている単語だったり、身振り手振りだったり、時には、画像見せたりして、その子どもが、何を 1 番伝えたいのかっていうのを、読み取るようにはしていた」等の語りから、日本語の理解が難しいため、ジェスチャーや画像などを通して視覚的な支援を通して伝えるような工夫を入園当初から実践していることが窺えた。

Table2: 「外国にルーツのある幼児の入園当初の様子」について抽出された頻出語リスト(上位50語)

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
子ども	38	給食	8
食べる	19	見せる	8
最初	16	持つ	7
泣く	15	周り	7
見る	14	出る	7
言う	14	上手	7
好き	14	多い	7
自分	14	保育	7
手	14	一緒	6
伝える	13	思う	6
英語	11	少し	6
外国	11	他	6
結構	11	通訳	6
言葉	11	入る	6
日本語	11	来る	6
友だち	11	行動	5
ルーツ	10	今	5
慣れる	10	使う	5
遊ぶ	10	食事	5
違う	9	先生	5
子	9	全然	5
様子	9	多分	5
落ち着く	9	体	5
話す	9	動かす	5
感じ	8	日本	5

② 外国にルーツのある幼児の初期においてみられる集団適応の様子についての階層的クラスター分析

入園した当初(初期)においてみられた集団適応の様子についての階層的クラスター分析の結果を Figure 1 に示した。分析結果を見ると「他児との関係に関する難しさ」「言葉に関する難しさ」「運動面の強みや視覚的な支援の有効性」「食事面に関する難しさ」「集団活動や他児とのやり取りに関する難しさ」「気持ちを落ち着けるための方法」「園生活に慣れることの難しさ」の 7 つのカテゴリーで構成されており、入園した当初にみられる様子として、集団参加の難しさや攻撃的な言動などの対応の難しさがみら

れる反面、周囲を見て理解するなどの強みがこの時期に見られ、言葉の難しさに対する保育者側の配慮によって、集団適応が促されているような様子も語られた。

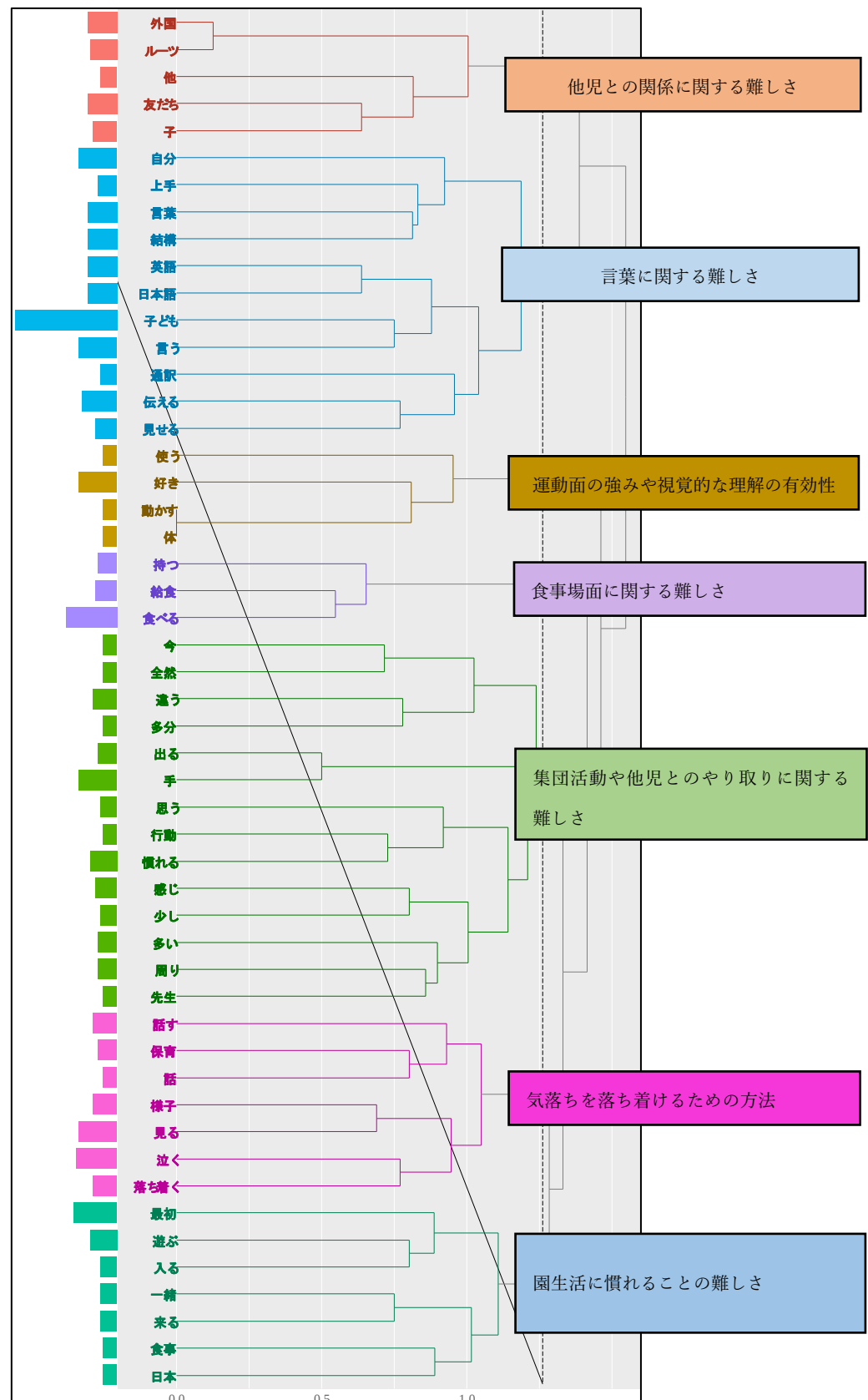


Figure 1: 「外国にルーツのある幼児の入園当初の様子」の階層的クラスター分析の結果

③ 外国にルーツのある幼児の初期においてみられる集団適応の様子についての共起ネットワーク

入園した当初（初期）においてみられた集団適応の様子についての共起ネットワーク図を Figure2 に示した。円の大きさと抽出語の出現回数を目安を右端に示している。「入園した当初（初期）においてみられた集団適応の様子」の共起ネットワーク図では、9つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語を含む01のグループでは、園の大きいものから「子ども」「日本語」「言葉」「友だち」のキーワードが含まれている。また、02のグループでは、「伝える」「言う」「英語」「見せる」などの7のキーワードから構成されており、「周りは日本人の子どもだから、言葉も通じなくて困っている様子がありました」というような、日本語をまだ十分に獲得できていないことによる意思疎通の難しさが語られる一方で、「日本語でも英語でも分からなかったり、まだ言葉がはっきり出なかったりっていう部分もあるので、シールや目印を使っていた。誰でも、日本人でも英語の子でもわかるように、シール、目印、わかりやすいように、目で見てわかるようにという目印を作って、ここだよって、もう繰り返し教えていった」「日本語で言って、英語で説明していた。簡単に説明していた」などのような、日本語の理解の難しさをカバーできるような伝え方の工夫や、少しでも日本語が身につくように支援しているような語りがみられており、日本語理解の難しさのみならず、保育者や園全体の配慮や個別的な支援が要約された。07のグループでは、円の大きいものから「食べる」「給食」「持つ」のキーワードが含まれている。インタビューでの語りの例としては、「今まで食べているのと全然違う、見た目の全然違うから、食べたいなって思わないっていうのもあって」「給食は日本の給食で、最初はまだ食べる方ではなかった。持ってきたパンとかを食べている」「例えばお給食に関しては、食が違うので、最初はもう本当食べなかったんで、お家の方が持ってきていました」があり、給食では、今までの食文化との違いにより、食事場面での難しさが表れていることが要約された。

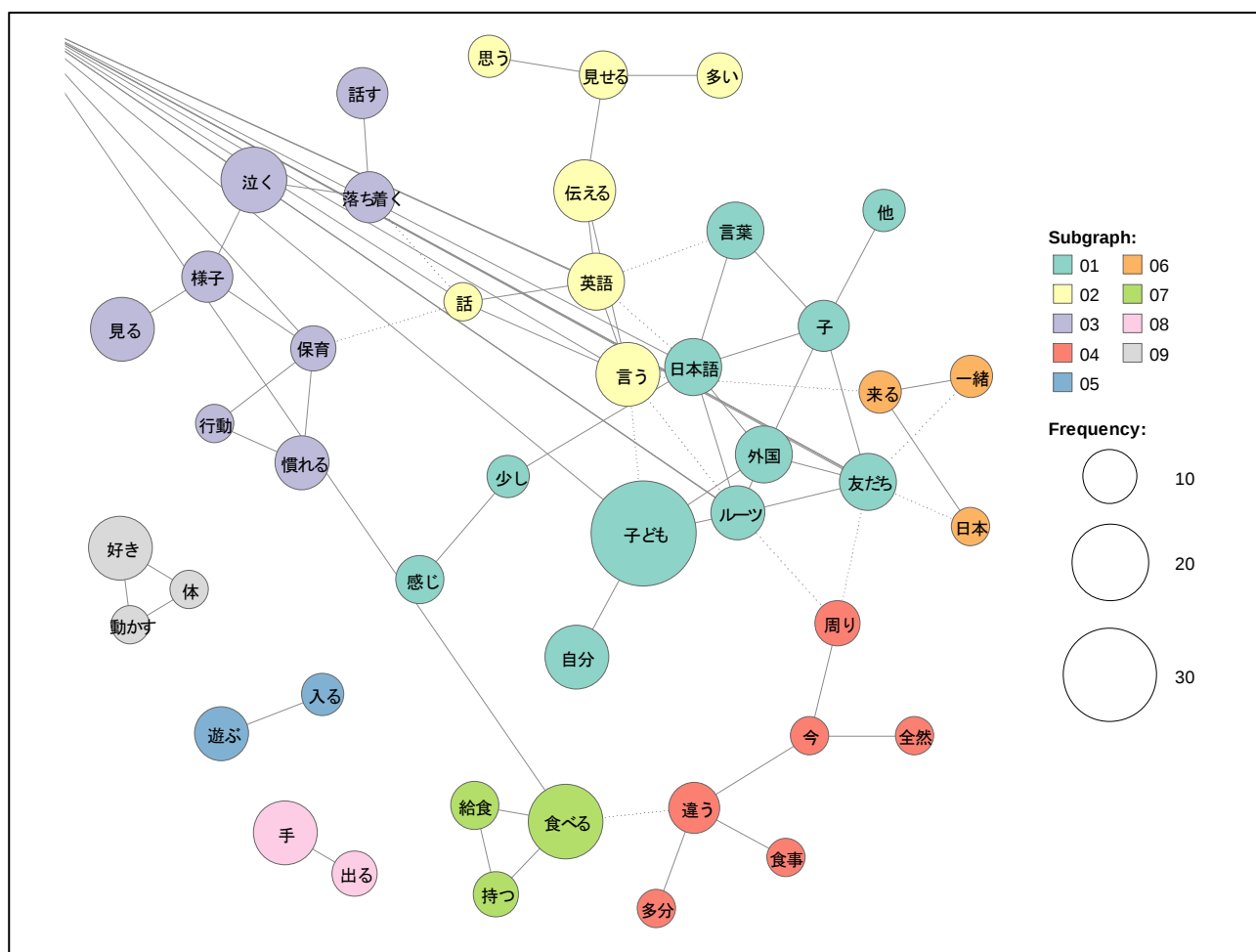


Figure2:「外国にルーツのある幼児の入園当初の様子」についての共起ネットワーク図

(2) 外国にルーツのある幼児の中期においてみられた集団適応の様子について

外国にルーツのある幼児の集団適応の様子で、中期においてみられた語りに対して、KH Coder を用いて分析を行った。以下にその分析結果を示す。

① 外国にルーツのある幼児の中期においてみられる集団適応の様子について抽出された頻出語リスト

中期においてみられた集団適応の様子についての頻出語の Table3 に示した。出現回数が高い語としては、「子ども」(28回)、「ルーツ」(18回)、「外国」(18回)、「自分」(18回)、「言う」(16回)であった。「自分」の使われ方を見ると、「着替えては、自分でしようっていう気持ちもあるが、難しいってなったら、先生して、感じですね。」「お遊戯会とかもあったので、行事とかで子どもたちの輪の中に入って、少し自分を出せるようになってきた。」「自分でもうお友だちの輪に入って、お友だちと一緒にいる安心感も感じ取れるようになってきていると思う。」などの表現がみられた。このことから、中期においては、集団適応における困難さもありつつ、少しずつ集団生活に慣れ、より自分から主体的に行動し、自身の気持ちをより表出できるようになるような変化がこの時期に見られることが推察される。「言う」の使われ方を見ると、「毎日のように使う単語、座ってとか、そういう単語はもう覚えていて、日本語で言うだけで、できるようになっていました。いただきますとも言えるようになってきた。」「怪我した時に痛いっていう言葉を使ったり、「これ」とか、「あれ」とかはよく言っていましたね。」「困ったことがあったり、悲しいことがあったりすると、

担任の私に近寄ってきて、先生って呼んだり、英語で言ったりだとか。」などの表現が多くみられた。このことから、初期においては、言葉で表現することの難しさが特徴として見られていたが、中期においては、徐々に言葉に慣れ、自身でも簡単な単語で表現できるようになるといった変化がみられることが明らかとなった。ただ、一方で、「周りは日本人の子だから、言葉も通じなくて困っている様子はありました。」という表現も複数見られ、この時期においても、言葉の課題を有する幼児は一定数存在することが推察された。

Table3:「外国にルーツのある幼児の中期の様子」について抽出された頻出語リスト(上位50語)

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
子ども	28	全部	6
ルーツ	18	難しい	6
外国	18	様子	6
自分	18	話す	6
言う	16	結構	5
食べる	12	言葉	5
多い	12	周り	5
日本語	12	先生	5
子	11	他	5
増える	11	単語	5
英語	9	中期	5
感じ	9	理解	5
見る	9	クラス	4
思う	9	トラブル	4
出る	9	家族	4
表現	9	学期	4
友だち	9	見せる	4
一緒	8	行く	4
覚える	8	作る	4
泣く	8	持つ	4
少し	8	集団	4
伝える	8	場面	4
日本人	8	生活	4
慣れる	7	注意	4
気持ち	6	伝わる	4

② 外国にルーツのある幼児の中期においてみられる集団適応の様子についての階層的クラスター分析

中期においてみられた集団適応の様子についての階層的クラスター分析の結果を Figure3 に示した。分析結果を見ると「集団生活場面への言葉に関する変化」「周囲を観察しながら適応する様子」「集団生活への慣れに伴う様々な変化」「言葉に関する変化」「他者とのやり取りに関する変化」「切り替えの難しさなどによるトラブル」「自己表現の幅の広がり」の7つのカテゴリーで構成された。中期にみられる様子として、繰り返し経験する中で、少しずつ日本語の理解が進み、集団生活の過ごし方が身についてくるといった変化が見られることが示された。

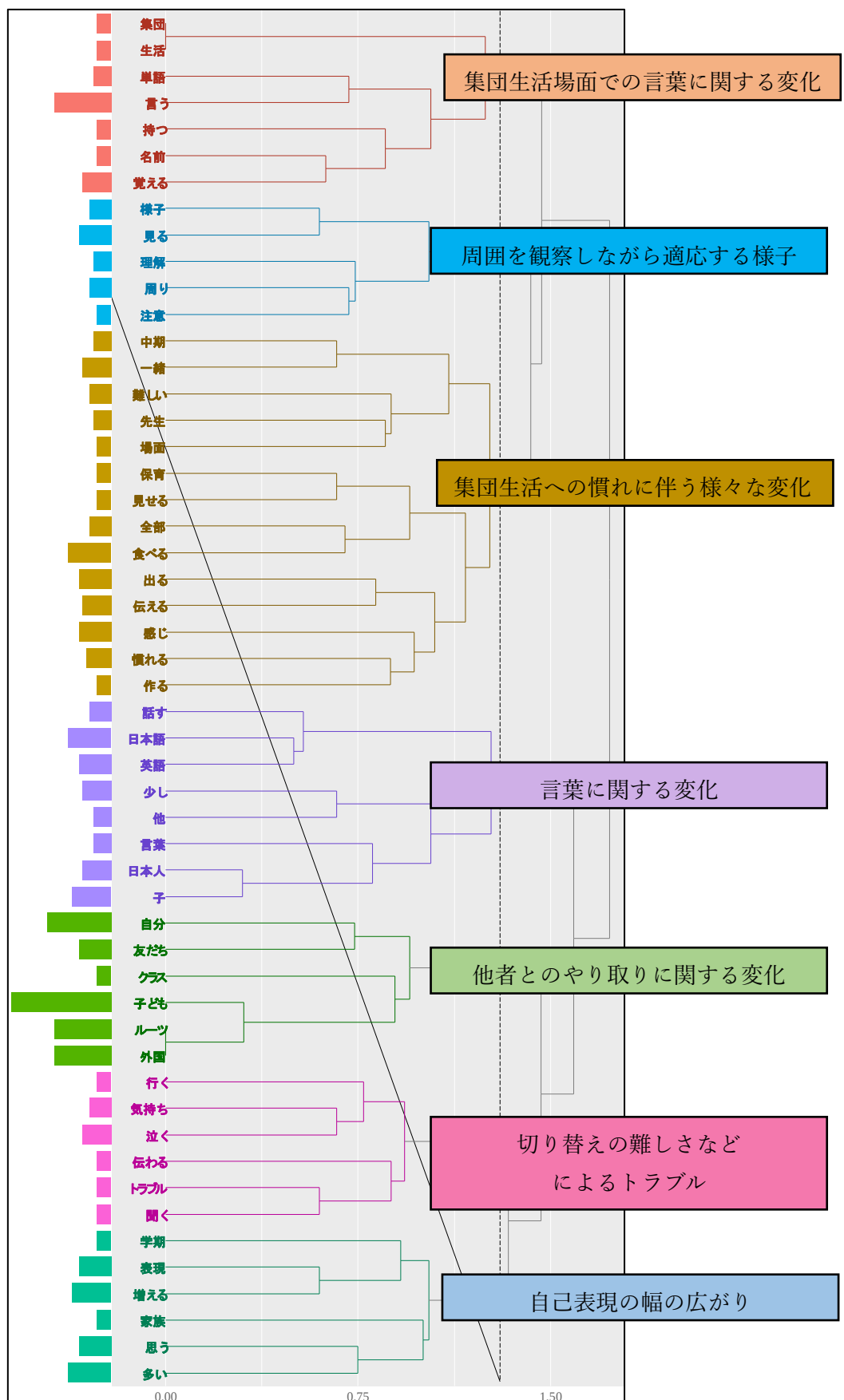


Figure3:「外国にルーツのある幼児の中期の様子」の階層的クラスター分析の結果

③ 外国にルーツのある幼児の中期においてみられる集団適応の様子についての共起ネットワーク

中期においてみられた集団適応の様子についての共起ネットワーク図を Figure4 に示した。円の大きさと抽出語の出現回数の目安を右端に示している。「入園した当初(初期)においてみられた集団適応の様子」の共起ネットワーク図では、6つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語を含む04のグループでは、円の大きいものから「言う」「日本語」「見える」「英語」「話す」などの8つのキーワードが含まれている。「表現の仕方が上手になったのか、日本語とかも少し話したり、単語で言ったり、指さしたりとかしていたり、言葉の発達も少し遅れていることあったのですが、どんどん表現が増えていた」「毎日のように使う単語、座ってとか、そういう単語はもう覚えていて、日本語で言うだけで、できるようになっていました。いただきますとかも言えるようになってきた」などの語りから、この時期から、徐々に日本語での教示に慣れ、日本語を聞いて行動でき、簡単な単語ではあるものの、日本語で表現できるような変化が見られていることが示された。また、01のグループでは、「食べる」「見る」「周り」「様子」「理解」などの12のキーワードが含まれている。「給食に関しては、まだまだ変わらずではあったのですが、1学期よりかは徐々に食べられるものが増えてきて」「給食とかでも、全部食べることができたら、食べたよって保育者に見せることができました」等のような、食事面に関する良い変化を示すエピソードが語られる一方で、「外国にルーツのある子どもって多いのが、シタケだとか、多分あんまり食べないのが、なんだろうっていう目で見ているような様子もあって」等のような、普段家庭では食べ慣れていないような、見慣れていないような食材に関しては、食べることが難しい等の様子も未だ見られることが示された。

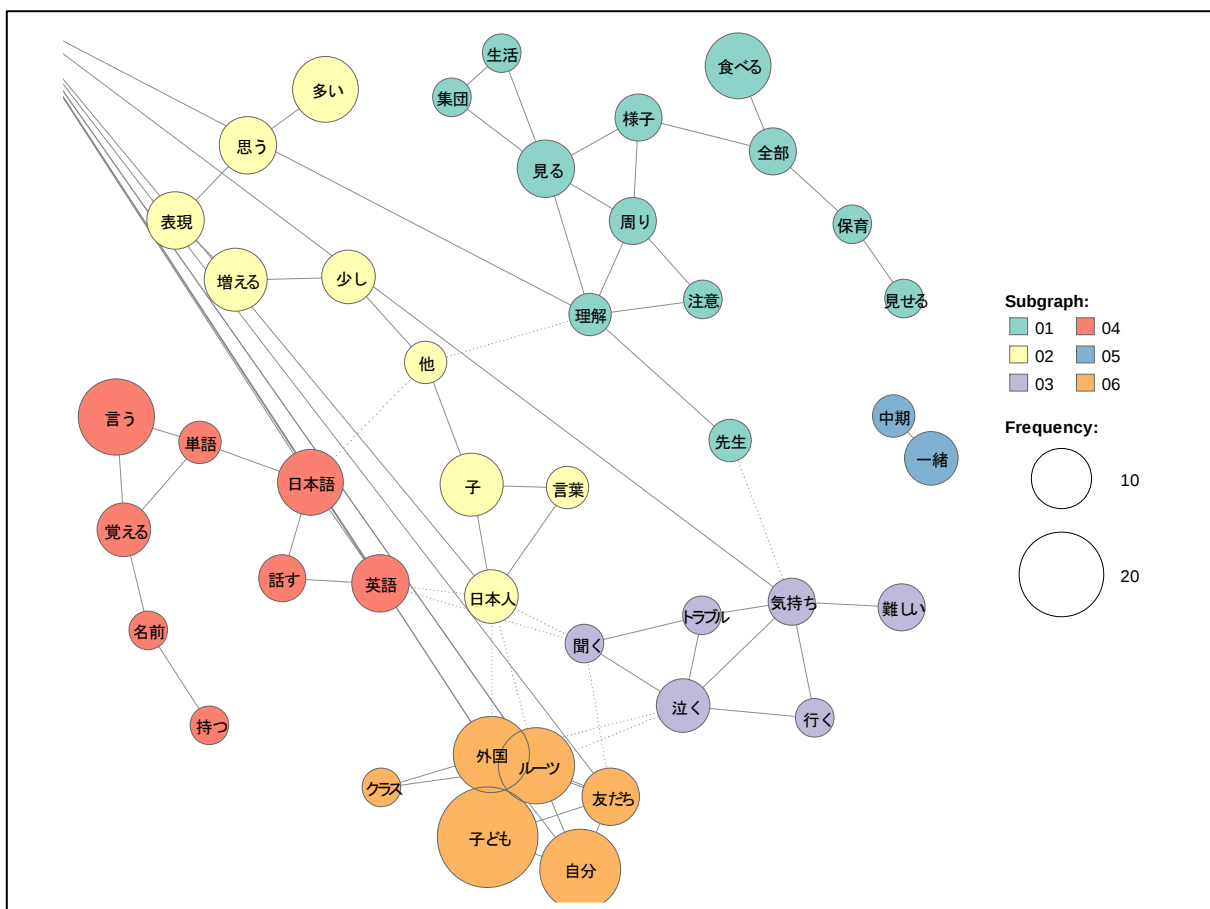


Figure4: 「外国にルーツのある幼児の中期の様子」についての共起ネットワーク図

(3) 外国にルーツのある幼児の後期においてみられた集団適応の様子について

外国にルーツのある幼児の集団適応の様子で、後期においてみられた語りに対して、KH Coder を用いて分析を行った。以下にその分析結果を示す。

① 外国にルーツのある幼児の後期においてみられる集団適応の様子について抽出された頻出語リスト

後期においてみられた集団適応の様子についての頻出語の Table4 に示した。出現回数が高い語としては、「子ども」「言う」「自分」「ルーツ」「外国」「見る」「英語」「友だち」「様子」「先生」であった。「見る」の使われ方を見ると、「全体をよく見ることができるようになるまでその子どもがなってきたので、三学期に関しては、困ったという様子もなく」「ある日突然、急に参加できるようになった。周りの子どもが踊っているのを見ていたからだと思う。その日、参加して、周りの子どもと同じようにもうちゃんと動いていた」「周りをよく見て、私たちがやっていることをよく見ているなって最近すごく感じている」などの表現が多くみられていることから、中期から引き続き、周囲をよく観察しながら取り組むことによって、集団に適応している様子がうかがえる。また、「できない時には、お友だちを見てごらんと伝えることや、もう 1 回説明するから聞いていてねと伝える等の工夫をしている」という記述もあることから、周囲を観察しながら取り組み方や参加の仕方を学ぶことができるという本児なりの適応の仕方を、保育者が関わりの中で引き出すなどの工夫を行っていることが窺える。「先生」に関しては、「先生って言って、こう指をさしてっていうのはすごくあったので、大きなトラブルまでには発展せずになった」「お当番活動はしているんですけど、ただ掃除をするだけじゃなくて「先生これしていいの」など自分から聞けるようになった。」という語りから、この時期になって、保育者を頼るなどの他者に援助を求める等の行動がみられることによって、困難な状況に対応しようとするような特徴がみられるようになることが推察された。

Table4:「外国にルーツのある幼児の後期の様子」について抽出された頻出語リスト(上位50語)

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
子ども	26	気持ち	4
言う	16	結構	4
自分	13	見守る	4
ルーツ	12	困る	4
外国	12	最近	4
見る	11	子	4
英語	10	持つ	4
友だち	9	手	4
様子	9	多分	4
先生	8	保育	4
伝える	8	練習	4
周り	7	ダメ	3
学期	6	印象	3
言葉	6	絵本	3
参加	6	感じる	3
思う	6	給食	3
増える	6	教える	3
聞く	6	行く	3
遊ぶ	6	最初	3
椅子	5	取る	3
一緒	5	出る	3
食べる	5	準備	3
他	5	対応	3
活動	4	喋る	3
感じ	4	日本語	3

② 外国にルーツのある幼児の後期においてみられる集団適応の様子についての階層的クラスター分析

後期においてみられた集団適応の様子についての階層的クラスター分析の結果を Figure5 に示した。分析結果を見ると「日々の生活における率先した行動」「食事面の変化」「言語面の変化による他児との交流」「集団参加の様子の変化」「活動への取り組みや他児とのやり取りにおける変化」「日本語理解の高まりに付随する変化」の 6 つのカテゴリーで構成されており、後期にみられる様子として、園生活への慣れによる食事面の変化や集団参加の様子の変化もみられるが、日本語理解が進むことにより、集団参加や他児とのやり取りにおいて様々な変化も見られることが示された。

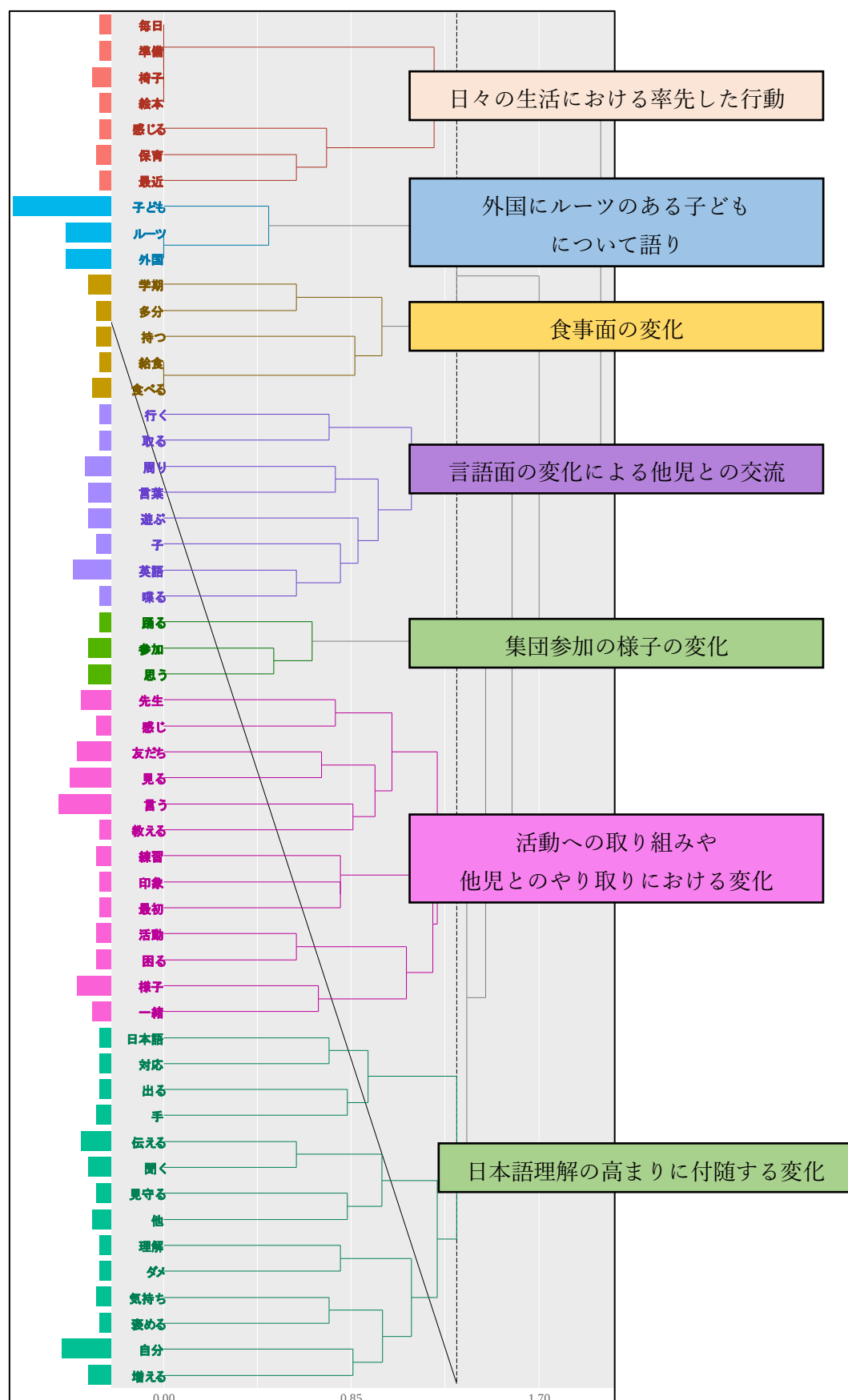


Figure5:「外国にルーツのある幼児の後期の様子」の階層的クラスター分析の結果

③ 外国にルーツのある幼児の後期においてみられる集団適応の様子についての共起ネットワーク

後期においてみられた集団適応の様子についての共起ネットワーク図を Fig.6 に示した。円の大きさと抽出語の出現回数の目安を右端に示している。「後期においてみられた集団適応の様子」の共起ネットワーク図では、9つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語を含む03のグループでは、円の大きいものから「子ども」「外国」「ルーツ」「言う」「周り」などの6のキーワードが含まれている。「その外国にルーツのある子どもが最終的に1人になったのですが、自分でこうしてほしい、してほしくないっていうのは、友だちにも表現できるようにはなってきていたので、日本の子どもたちは、言われると、ダメなことしちゃったなって、この外国にルーツのある子どもは怒っているなっていうのを多分感じとって、トラブルまでには発展することがなくなった」「困ったことはなく、周りの子どもたちも成長し始めてくるので、その外国にルーツのある子どもが英語を使っても、なんか言っていると感じ取ってくれるので、大変なことは、もう後期はないですね」等の語りから、外国にルーツのある幼児の言語面における良い変化もあるが、周囲の子どもも、外国にルーツのある子どもへの理解が進むことによって、大きなトラブルに発展することなく過ごせるようになることが示された。また、01のグループでは、「英語」「行く」「しゃべる」「見守る」などの9のキーワードが含まれている。「基本英語なので、友だちとなかなかコミュニケーションは取れていないのかな」「保育者が英語も喋って、その外国にルーツのある子どもも英語いで喋っているのですが、わかるどころとわからないところもない自分があるので、それは申し訳ないと感じる」「英語自体の発音とかがよくなり、語彙も増えていることをミーティングでも話をした」等、発音の改善等の英語での表現の良い変化がみられるものの、周囲の子ども、または保育者も未だ英語でのやり取りに難しさを感じていることが窺えた。また、「言葉が分からなくても、最後まで何を伝えようとしているのかを聞いてあげたりとかして、職員、担任だけじゃなくて、他の職員ともこう連携して、見守っていこうっていう体制を作っていたことが、大きかったんじゃないかなって思いますね」等のように、すべての場面において、保育者が援助をするのではなく、本児の表現を待ち、職員全体で見守ろうとする体制を取っていたことも語られた。

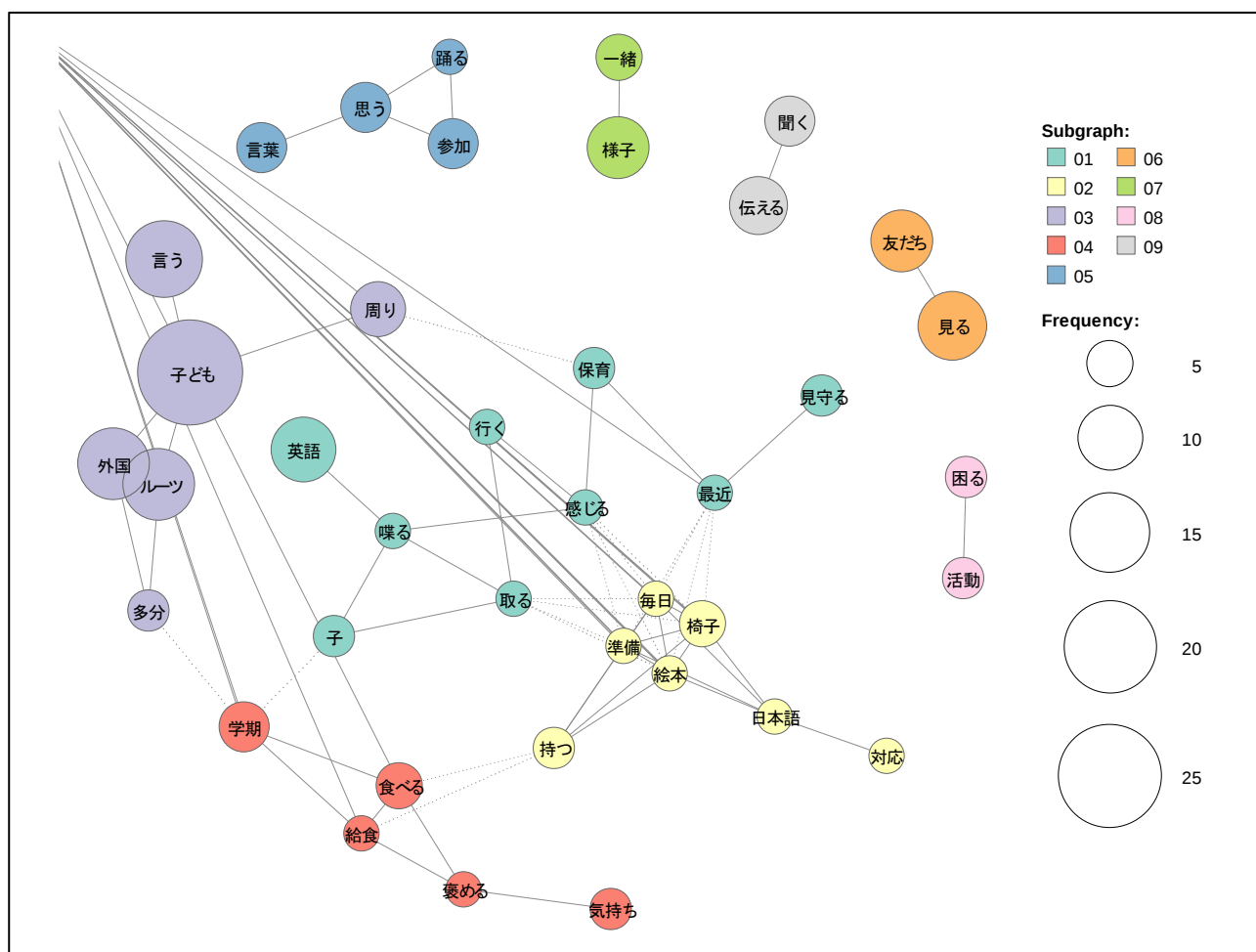


Figure6:「外国にルーツのある幼児の後期の様子」についての共起ネットワーク図

(4) 外国にルーツのある幼児の対応に関する困難感と工夫について

外国にルーツのある幼児の保育を実践する上で感じた困難感と、その困難感に対する対応の工夫についての語りに対して、KH Coder を用いて分析を行った。以下にその分析結果を示す。

① 外国にルーツのある幼児の対応に関する困難感と工夫に関する語りについて抽出された頻出語リスト

外国にルーツのある幼児への対応の困難さとその困難さに対する対応の工夫についての頻出語を Table5 に示した。出現回数が高い語としては、「子ども」(26回)、「言う」(16回)、「自分」(13回)、「ルーツ」(12回)、「外国」(12回)、「見る」(11回)、英語(10回)であった。「言う」の使われ方を見ると、「何かあった時に、英語で聞いても、英語は話さないの、その時に何が起きているのか、その 1 番困ったのが、多分、体調が悪いんじゃないかなっていう時があって、聞きに行ったのですが、どこが痛いのか、どこの具合が悪いのか、もう、英語も話さないですし、言葉も話さなかった。」などの表現がみられた。時期に限らず、外国にルーツのある幼児を対応する際の困難感の 1 つとして、言葉によるやり取りの難しさが推察される。また、「子どもが言っていることをまず聞いて、その後、私が伝えたいこと言って、それ直接じゃなくて、通訳の人ってそれを聞いてって言ってとなる。しかもその意図とか、声色とか、伝え方とか、本当は私が言っているのですが、まるで通訳の先生が言っているようになることがあります」という語りから、通訳者の介入などの具体的な支援を行っているものの、一方で、子どもにとっては、通訳との言葉でのやり取り

りが中心となってしまうため、保育者と子どもの関係性の築きにくさを感じていることが示唆された。「見る」では、「外国の単語をパソコンで出して、紙にした状態で、下には日本語が書いてあるっていうので、その張り出しとくと、子どもたち興味を持って見るので、そこでその外国にルーツのある子どもにわからないことがあったらこうやって教えてあげてねっているのをよく言っていましたね」というように、外国にルーツのある幼児への視覚的な支援ではなく、周囲の子どもたちを対象として、外国にルーツのある子どもと関わりが持てるような配慮をしていることが語られた。このことから、言葉以外の視覚的な支援によって、対象児の集団適応を促していく方法のみならず、周囲の子どもたちに対しても、英単語などを見て発言するようにすることによって、周囲の子どもとの関わりをきっかけを作るような配慮を行っていることが示された。

Table5:「外国にルーツのある幼児の対応に関する困難感と工夫」について抽出された頻出語リスト(上位50語)

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
子ども	26	気持ち	4
言う	16	結構	4
自分	13	見守る	4
ルーツ	12	困る	4
外国	12	最近	4
見る	11	子	4
英語	10	持つ	4
友だち	9	手	4
様子	9	多分	4
先生	8	保育	4
伝える	8	練習	4
周り	7	ダメ	3
学期	6	印象	3
言葉	6	絵本	3
参加	6	感じる	3
思う	6	給食	3
増える	6	教える	3
聞く	6	行く	3
遊ぶ	6	最初	3
椅子	5	取る	3
一緒	5	出る	3
食べる	5	準備	3
他	5	対応	3
活動	4	喋る	3
感じ	4	日本語	3

② 外国にルーツのある幼児の対応の困難感とその対応についての階層的クラスター分析

外国にルーツのある幼児の対応の困難感とその対応についての階層的クラスター分析の結果をFigure7に示した。分析結果を見ると「文化の違いによる対応の難しさ」「言葉でのやり取りに関する難しさ」「集団生活への適応の難しさ」「気持ちを落ち着かせるための配慮」「他児とのやり取りにおける難しさ」「気持ちの切り替えに関する難しさとその対応」「言葉に関する支援の実施による情緒の安定」「日本語理解の難しさに付随する対応の困難感」「対象児の性格的な強みを生かした支援」の9つのカテゴリーで構成されており、外国にルーツのある幼児の対応の困難感とその対応の工夫については、言葉でのやり取りに関する難しさのみならず、異文化による集団生活への慣れなさなどがその対応の難しさとして語られ、対応の工夫としては、集団活動への取り組みの難しさや他児とやり取りの難しさに対し、情緒の

安定を目的とした個別的な関わりや配慮、通訳や翻訳機等による言語面の支援、対象児の性格的な強みが活かされるような状況設定等を行っていることが示された。

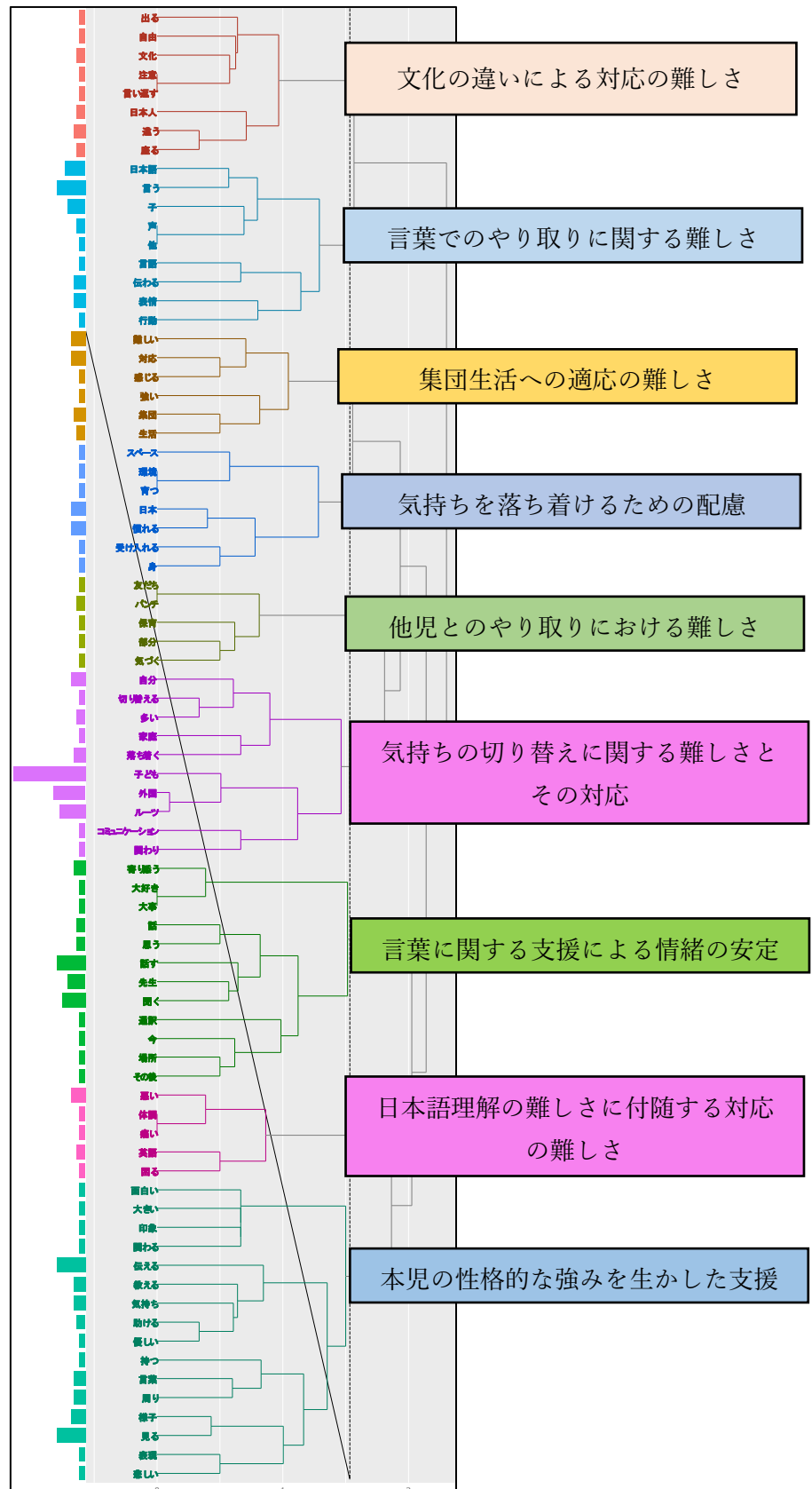


Figure7:「外国にルーツのある幼児への対応の困難感とその対応について」の階層的クラスター分析の結果

③ 外国にルーツのある幼児への対応の困難感とその対応についての共起ネットワーク

外国にルーツのある幼児への対応の困難感とその対応についての共起ネットワーク図を Figure8に示した。円の大きさと抽出語の出現回数の目安を右端に示している。「外国にルーツのある幼児への対応の困難感とその対応について」の共起ネットワーク図では、12つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語を含む03のグループでは、円の大きいものから、「言う」「聞く」「日本語」「先生」のキーワードが含まれている。また、04のグループでは、「通訳」「その後」「今」「表現」等のキーワードが含まれている。「何かあった時に、英語で聞いても、英語は話さないの、その時に何が起きているのか、その1番困ったのが、多分、体調が悪いのではないのかという時があって、聞きに行ったのですが、どこが痛いのか、どこの具合が悪いのか、もう、英語も話さないですし、言葉も話さなかった」等の言葉に関する難しさが挙げられ、通訳などを介した言葉かけを行うにしても、「子どもが言っていることをまず聞いて、その後、私が伝えたいこと言って、それ直接じゃなくて、通訳の人ってそれを聞いてって言ってとなる。しかもその意図とか、声色とか、伝え方とか、本当は私が言っているのだけど、まるで通訳の先生が言っているようになることがあります」というように、子どもにとっては保育者からの声掛けではなく、通訳の声掛けとなってしまう、関係性を築いていくうえで難しさを感じるということも語られた。02のグループでは、「慣れる」「自分」「多い」「スペース」「受け入れる」などのキーワードが含まれている。「集団生活に慣れてない子の対応に難しさを感じるがあった。周りを引き込む力が強いと、保育が成り立たないことがある」「ある子どもが、座り方が日本と外国って違うじゃないですか。日本は正座だったり、体操座りだったりがあるのですが、あぐらをかく子どもがいて、それに慣れるまでが時間がかかっていた」というような、日本文化への馴染めなさによる対応の難しさが語られた。また、「外国にルーツのある子どもの保護者の方の家庭での対応だったら、自分が落ち着くまで切り替えて待つみたいな、そういう対応される家庭が多い。その外国にルーツのある子どもたちもいつもそういう環境で育っているから、自分のスペースが欲しくて、自分が落ち着けるようになってから気持ちを切り替えて次に移すみたいな感じなので、スペースを設定してそっとしておいてっていうのが多いですね」という語りから、家庭での習慣などを取り入れて個別的な支援を行っている園が一定数存在することが窺えた。

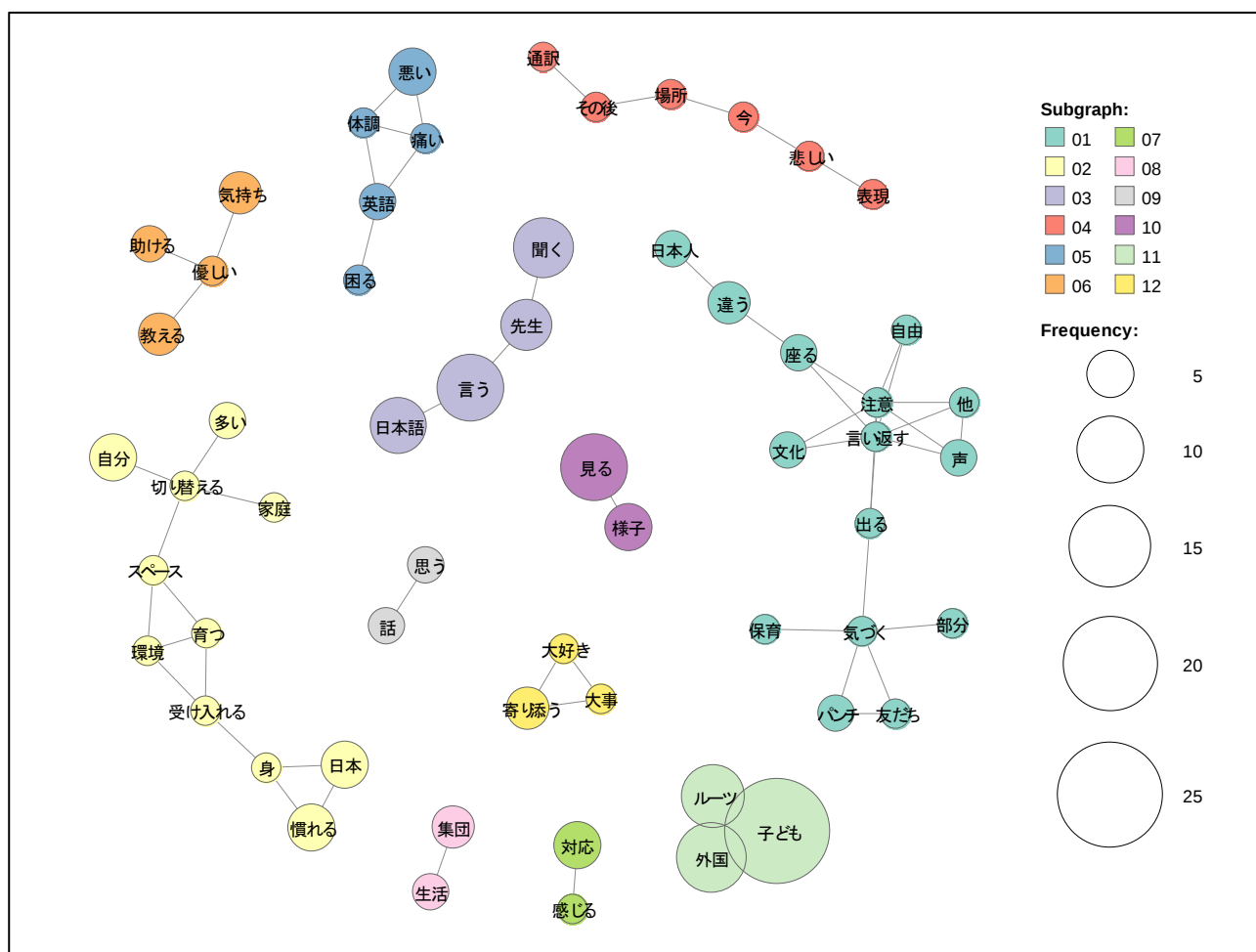


Figure8: 「外国にルーツのある幼児への対応の困難感とその工夫」についての共起ネットワーク図

(5) 外国にルーツのある幼児の保護者への対応に関する困難感と工夫について

外国にルーツのある幼児の保育を実践する上で感じた困難感と、その困難感に対する対応の工夫についての語りに対して、KH Coder を用いて分析を行った。以下にその分析結果を示す。

① 外国にルーツのある幼児の保護者対応の困難感と工夫に関する語りに抽出された頻出語リスト

外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその困難感に対する対応の工夫についての頻出語を Table6 に示した。出現回数が高い語としては、「伝える」(24回)、「保護」(13回)、「子ども」(12回)、「言う」(11回)、「英語」(9回)、「伝える」(8回)であった。「伝える」の使われ方を見ると、「重要なことは、基本的にはもうしっかりわかるように口頭で教えたりとか、手紙に英訳を書いて渡したりっという風にして、わかりやすく伝えるようにした」「怪我、怪我をさせてしまった時とか、子ども同士でトラブルが起きてしまった時とかに、その流れを伝えるための適切な表現とかは、通訳の方がしてくださっていたので、誤解して伝わるとか全くなかったですけど、それでも私の伝え方を注意して、どう伝えたらうまく伝わるのかってところは気を付けました」などの表現が多くみられた。このことから、保護者対応に関する困難感とその対応において、保育者は情報伝達における工夫が実践されていることが推察された。ただ、「日本人だったら察するところとかがあるんですけど、その細かいところを本当に伝えていかないといけないってところがあるので、言ってしまうと、なんでこうなったとか、何をしていたこうなったのかっていうの

とか、すごい詳しくまとめて伝え、通訳の方にも伝えるっていう感じで対応していた」「保護者の方に伝える
 ときのことですけど、まだ難しいと思う。普通の会話だったら会話のキャッチボールにですけど、間に通訳
 の方が入って、そこを介してのキャッチボールがあるから、それが難しいなといつも思っている」という、通
 訳などを利用して、いまだ保護者とのやり取りに困難感を感じていることも明らかとなった。

Table6:「外国にルーツのある幼児の保護者への対応に関する困難感と工夫」について抽出された頻出語リスト(上位50語)

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
伝える	24	説明	3
保護	13	直接	3
子ども	12	渡す	3
言う	11	同士	3
英語	9	入る	3
伝わる	8	理解	3
ルーツ	7	話	3
外国	7	話す	3
持つ	7	いつ	2
難しい	6	イラスト	2
聞く	6	カレー	2
使う	5	キャッチボール	2
通訳	5	トラブル	2
日本語	5	メモ	2
風	5	違う	2
お家	4	英訳	2
怪我	4	会話	2
思う	4	基本	2
書く	4	教える	2
先生	4	携帯	2
お母さん	3	見せる	2
園	3	出来事	2
感じ	3	詳しい	2
言える	3	多分	2
手紙	3	対応	2

② 外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその対応についての階層的クラスター分析

外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその対応についての階層的クラスター分析の
 結果を Figure9に示した。分析結果を見ると「保護者への情報伝達の工夫」「英単語やメモを使用した
 伝達」「イラストや子どもに伝えるなどの工夫」「園での出来事を伝える際の工夫」「保護者との自然なや
 り取りに関する困難感」「保護者への情報伝達に関する不安」「通訳を用いた園での出来事の伝達の工
 夫」の 7 つのカテゴリーで構成された。外国にルーツのある幼児の保護者への対応に関する困難感とそ
 の対応の工夫については、主に園での出来事や行事の日程等の情報を伝達することへの工夫と配慮が
 主に語られ、伝える際の不安等もありながら、手紙、通訳や翻訳機の使用などの様々な方法を用いている
 ことが示された。また、通訳を介してのやり取りや、翻訳機の使用などを行っているものの、自然な会話と
 なりにくいことが課題であると感じている保育者も一定数存在することが窺えた。

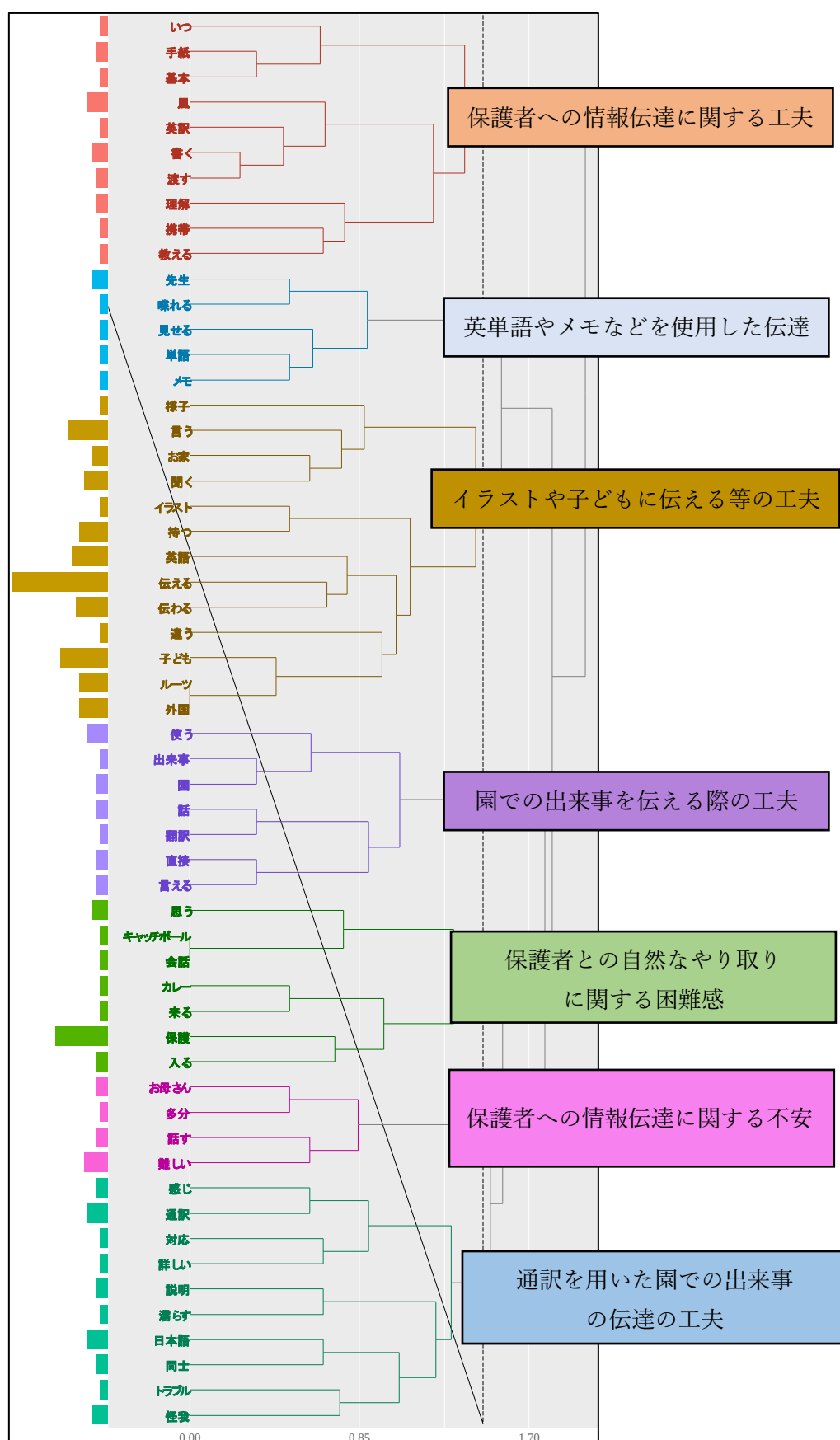


Figure9:「外国にルーツのある幼児の保護者対応の困難感の対応について」の階層的クラスター分析の結果

③ 外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその対応についての共起ネットワーク

外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその対応についての共起ネットワーク図を Figure 10 に示した。円の大きさと抽出語の出現回数の目安を右端に示している。「外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその対応について」の共起ネットワーク図では、7つのサブグラフが示された。出現頻度の多い抽出語を含む02のグループでは、円の大きいものから「英語」「難しい」「使う」「直接」「言える」「翻訳」等のキーワードが含まれている。「日本語同士だと、直接こういろんなことが言えることを、英語だと考えながら考えながらなので、伝えにくかったりするので、外国にルーツのある子どもに對しての対応とかいうのも難しいところがたくさんありましたね」「園であつた出来事とかを話はするのですが、私もあんまりそんな英語が上手じゃないので伝わらなかつたり、翻訳アプリを使つたりするのですが、こう素直に言えないというか、自分の思いを直接こう保護者に言えないというか、もどかしく接してしまうところが難しいと感じますね」等の語りから、英語による表現の仕方や日本語のニュアンスを英語としてどのように伝えるか等の難しさを感じていることが示された。また、「お母さんも何か話したいのではないかなと思うが、難しいよなっていう感じで言ってくれるので、申し訳ない気持ちがずっとありますね」等のように、保護者側も伝えることに對しての難しさを感じているような様子も語られた。01のグループでは、円の大きいものから、「子ども」「伝わる」「言う」「聞く」「待つ」などのキーワードが含まれている。「家庭の方でも、こういうメニューがあつたので食べてみてくださいっていう、保護者の方にも言っていますね」「日本人だったら察するところがあるのですが、細かいところを本当に伝えていかないといけないっていうところがあるので、言ってしまうと、なんでこうなつたとか、何をしていたこうなつたのかっていうのとか、すごい詳しくまとめて伝え、通訳の方にも伝えるっていう感じで対応していた」等のような、保護者に伝達する際の工夫等が語られた一方で、「直接迎えに来てくださる方は、顔を見て話ができるので、何か園でトラブルがあつた時に説明しても納得されない方とかもいらつしゃつたりだとか、先生からこう聞いたけど、子どもはこう言っているっていう、入れ違いといいますか、そういうのとかもあつて」「先生から聞いたことと子どもが言っていることが異なつていたりとか、まだ幼いので、その子が言っていることが違つて伝わつていたねっていうのもありました」等、十分に園での様子が伝達されにくい状況や、保護者への説明の難しさを感じているような語りが見受けられた。

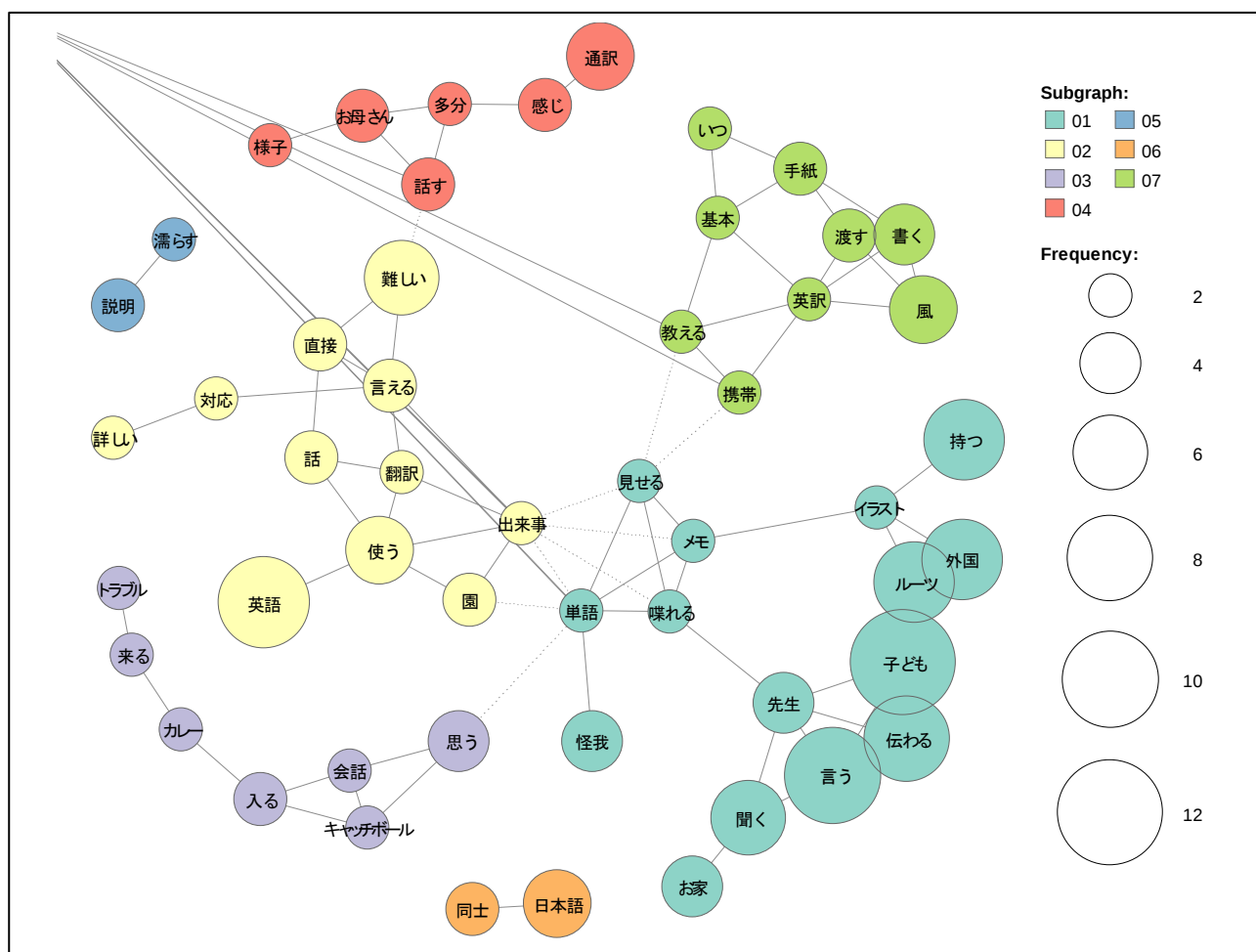


Figure 10: 「外国にルーツのある幼児の保護者への対応の困難感とその工夫」についての共起ネットワーク図

(6) 抽出語と外部変数の共起ネットワーク

本研究では、調査協力者に対して、想起した外国にルーツのある幼児の入園当初の様子、入園してからしばらく経った中期の様子、入園後しばらくたってから退園または現在に至るまでの後期の様子についての聞き取り、子ども対応に関する困難感とその工夫、保護者対応に関する困難感とその工夫についての聞き取りを行っている。「初期の適応の様子」「中期の適応の様子」「後期の適応の様子」「子ども対応の困難感と工夫」「保護者対応の困難感と工夫」の5つを外部変数とし、抽出語の出現頻度と5つの外部変数の関連を明らかにする目的において、抽出語と外部変数の共起ネットワーク図の描画を行った。結果を Figure 11 に示す。初期の適応の様子における抽出語は、円の大きいものから「子ども」「自分」「見る」「食べる」等との関連が深いことが分かった。中期の適応の様子における抽出語は、円の大きいものから「子ども」「自分」「言う」「食べる」等との関連が深いことが分かった。後期の適応の様子における抽出語は、円の大きいものから「子ども」「自分」「言う」「伝える」「日本語」等との関連が深いことが分かった。子ども対応に関する困難感と工夫に関する語りにおける抽出語は、「子ども」「ルーツ」「外国」「伝える」「話す」「先生」等との関連が深いことが分かった。保護者対応における困難感と工夫に関する語りにおける抽出語は、「言う」「伝える」「日本語」「英語」「聞く」等が関連深いことが分かった。

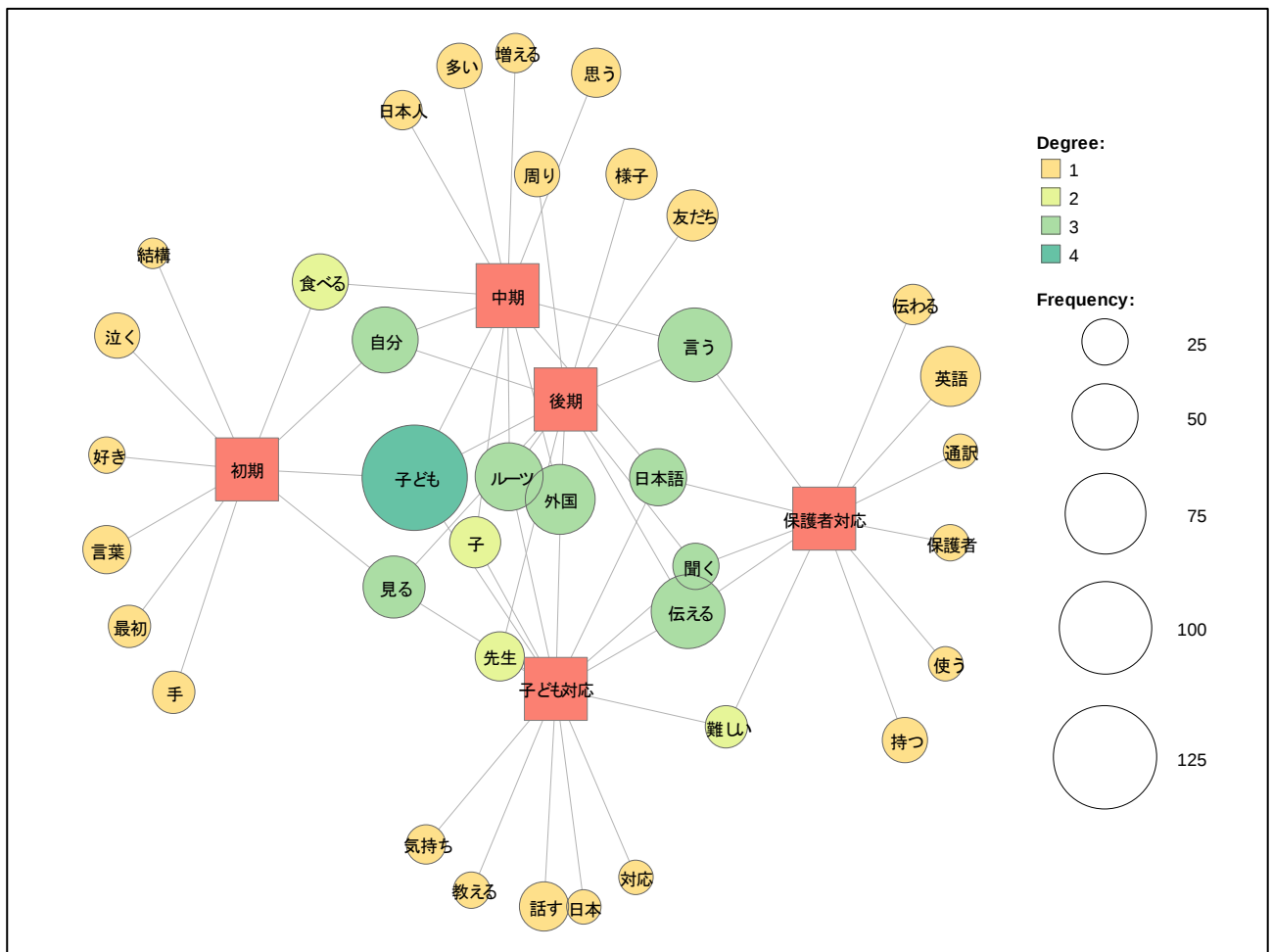


Figure 11: 外部変数と抽出語の共起ネットワーク図

5. まとめと今後の課題

本調査の結果、外国にルーツのある子どもの保育場面での適応について、以下のようなことが示された。

- ① 入園当初は、日本語理解の難しさ、異文化による食事面の困難さ等により、集団生活や他児とのやり取りにおいて、集団生活への適応と保育者の対応の難しさが顕著にみられる幼児が存在することが明らかとなった。また、この時期から、保育者が言語面、食事面など様々な場面で個別的な配慮を行っていることが明らかとなった。
- ② 入園してしばらくたった中期の段階においても、言語面、食事面の課題が未だみられるものの、言語面、食事面ともに少しずつ良い変化が見られはじめ、集団生活に適応し始める様子が見られることが明らかとなった。
- ③ 入園からしばらく経ってから卒園、または現在に至るまでにおいては、ほとんど集団場面で適応の困難さを示すことはなく、初めから有していた性格的な強み等を発揮し、良い適応を示すことが増えることが明らかとなった。
- ④ 外国にルーツのある幼児の対応において、保育者が感じる困難感とその対応の工夫については、言葉に関するものが多いものの、表情や声のトーン、イラストなどの言葉以外の方法を用いて子どもの理解を促すことや、英語と日本語を対応させるような関わりによって、本児の日本語への理解を促すような工夫を行っている

ことが明らかとなった。日本の文化へのなじめなさからくる対応の難しさも少なからず存在することが明らかとなった。

- ⑤ 保護者対応においては、園での様子や、行事の日程、準備物などの情報伝達に関する困難感とその対応の工夫が多く語られた。通訳や翻訳機などを使用しているケースも存在するものの、通訳や翻訳機を介してのやり取りになるため、自然なコミュニケーションになりにくいことが困難感として挙げられた。

今後の課題としては、今回インタビュー調査を実施した保育者が 6 名であり、今後より多くのデータを収集する必要があると考えられる。また、保育者の対応の工夫に関しても、園の方針や職員の体制なども大きく影響を与えることが推察されるため、今後は外国にルーツのある子どもを受け入れている幼稚園・保育所・認定こども園のそれぞれの受け入れ体制や園の方針なども踏まえた詳細な検討が必要であると考えられる。

資料：インタビューガイド

本インタビューでは、「外国にルーツのある幼児の行くに関するインタビュー調査ご協力をお願い」にて説明の通り以下の質問についてお伺いします。

【質問 1】 あなたの所属と保育者としての経験年数についてお聞かせください。

【質問 2】 これまで、外国にルーツのある幼児の保育に携わった経験についてお聞きします。何人くらい、またはどのくらいの期間外国にルーツのある幼児の対応をした経験があるかを教えてください。担任をした際に、クラスの何名程外国にルーツのある幼児が在籍していたかも教えてください。

【質問 3】 これまでの保育者経験の中で、外国にルーツのある幼児を 1 名思い浮かべていただきます。これまで対応した外国にルーツのある幼児の中で、一番入園当初の時から卒園・退園するまでに良い変化を示した幼児を 1 名思い浮かべてください。（「入園当初は対応に難しさを感じていたが、その後、卒園・退園する時には、保育園の集団活動において適応的な様子を見せるようになった幼児」と言い換えても良い）

【質問 4】 その子の入園時期とその時の年齢、入園当初の様子を教えてください。入園当初、適応に困難を示した様子や、またうまく集団に適応できていた様子等について教えてください。

【質問 5】 それでは、入園中期の時の様子を教えてください。適応に困難を示した様子や、またうまく集団に適応できていた様子等について教えてください。また、入園当初の時と違った様子を見せていた場合は、そのことも教えてください。

【質問 6】 それでは、入園後期の時の様子を教えてください。適応に困難を示した様子や、またうまく集団に適応できていた様子等について教えてください。また、入園当初の時、入園中期と違った様子を見せていた場合は、そのことも教えてください。

【質問 7】 これまでの外国にルーツのある幼児の保育を実践してきた経験を振り返って、子どもの対応において困った場面はどんな場面ですか。また、外国にルーツのある幼児の保育をする上で実践していた工夫について教えてください。

【質問 8】 外国にルーツのある幼児の保育を実践する上で、保護者と関わる機会があったかと思います。外国にルーツのある幼児の保護者を対応する上で、困ったことや難しかったことはありますか。また、保護者対応において工夫したことについて教えてください。

※【質問 4】～【質問 6】において、状況に応じて追加・変更する質問

・保育者が、園生活の様子が変わってきたと感じたのはいつ頃でしょうか。その時にどのようなきっかけがありましたか。良い変化を示した時期は、入園からどのくらいたった頃でしょうか。

- ・その子どもの対応をする上で、一番難しいと感じた場面はどのような場面でしょうか。
- ・対応が難しいと感じた場面について、その要因をどのように考えていましたか。
- ・対応が難しいと感じた場面について、保育者としてどのような対応の工夫をしていましたか。
- ・対応が難しいと感じた場面は、その後も継続して見られていましたか。
- ・対応が難しいと感じた場面は、その後、変化が見られましたか。変化が見られたとしたら、どのような変化でしたか。そのきっかけはどのようなものだったのでしょうか。
- ・その子どもの保育をする上で、成長を感じた場面はどのような場面でしょうか。それは、いつ頃だったのでしょうか。どのようなきっかけがあったのでしょうか。
- ・成長を感じた場面について、その要因をどのように考えていましたか。
- ・成長を感じた場面について、その成長や変化を促すために保育者としてこれまでどのような対応の工夫をしていましたか。

執筆分担

執筆内容	執筆担当者
I・II・III	川邊 浩史, 鬼塚 良太郎
IV	下池 洸史朗

QSP 子ども育成 WG 共同研究 構成メンバー

所属	構成メンバー
長崎短期大学	下池 洸史朗
九州龍谷短期大学	鬼塚 良太郎
西九州大学短期大学部	川邊 浩史

九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業
子ども育成 WG 共同研究

幼児教育・保育現場における外国にルーツを持つ
家庭に関する調査
調査報告書(第3報)

2025 年3月 24 日発行

発行者 九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携
プラットフォーム事業 子ども育成 WG 共同研究
責任校 長崎短期大学 保育学科
〒858-0923 佐世保市椎木町 600 番地
TEL.0956-47-5566 Fax.0956-47-5596

印刷所 ラクスル株式会社
〒106-0041 東京都港区麻布台一丁目3番1号
麻布台ヒルズ 森JPタワー 19階
TEL.03-4577-9200